平成30年度長崎大学大学院教育学研究科公開講座 教職大学院地域連携講座第1弾「これからの学校教育を考える」

後援:長崎県教育委員会、長崎県教育会

長崎県及び長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻が求める学校における管理職教員について、長崎の教育の変遷や教育観を踏まえながら、これから求められる学校や教員のあるべき姿について、卓越した実績を持つ教育行政・教員経験者と大学教員の話題提供を元に、会場参加型の学び合いを展開することで、「これからの学校教育を考える」機会を提供し、長崎県の教育界に貢献することを目的に実施した。

1日目(6月2日14:00~17:00 会場:教育学部11番教室) 【進行役】教育学研究科長 松元浩一

講演①「教育の不易と流行 ー学校を導く者に求められることー」 元教育次長 山崎滋夫 先生

【概要】学校の教育経営(指導と管理)にあたって養うべきものは、①自らの教育観を養い続けていくこと、②校長・教頭という職に対する自らの覚悟を養い続けること、③人間としての雅量を広げること、④学ぶものへあたたかい眼差しとエール、生命の成長を称える気持ちを持ち続けることである。また、学校を導くためになすべきこととその配慮として、①経営理念と教育課程の編成・管理、②教員組織の運営、教育力の集結と協働、④校風・伝統の形成について述べられた。

【感想】「学びは個人に結実する」という言葉に感銘を受けました。経営方針しかり教育課程しかり、全ての教育活動はひとりひとりの子どもを、どう成長させるか、どう育てたいのかという熱い思いと責任が、個を育て、その個が集団や地域を作っていくということを改めて感じました。教育の不易の部分のお話で管理職の心構えを学んだが、これは教師としての心構えを表したものでもありました。地域に積極的に関わって授業をしていきたいと思いました。

講演②「変容の時代に求められる資質」 前長崎大学長 片峰 茂 先生

【概要】 辺境の地で日本民族が生き残り続けるために身に付けた学び続ける能力が、グローバル化する世界の中で、どうあるべきか?変わるべきか変わらないべきか?という根源的な問いが提示された。グローバル化が進展する社会で、そのスピードに対して科学技術の果たす役割や人口減少と高齢化に対して、地方創生と異次元の技術革新の観点からその可能性が述べられた。そのうえで、これからの若者に望むこととして、形式知と暗黙知、チーム化、志を持つことの大切さが示された。

【感想】 グローバル社会におけるふるさと教育のあり方について考えることができました。「グローカル」とは何たるか、その根幹を学ばせていただきました。中学校の教員、社会科の教師として、「何を求めるのか」いい導きをいただいたと考えています。「チーム」・・・難しいですがやってみたい!キーは「協働」だと考えました。自分自身の思い、志をしっかり持つこと、変化し続けることをこれからもがんばります。ボトムアップのお話、勇気をいただきました。



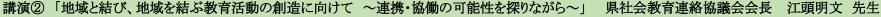


2日目(6月23日14:00~17:00 会場:教育学部11番教室) 【進行役】地域教育総合支援センター教授 池田浩,教育学部准教授 井手弘人

講演① 「行政から見たこれからの教育への期待 ~教職大学院での学びの意義~」 前長崎県教育長 渡辺敏則 先生

【概要】専門職大学院としての教職大学院の目的と概要を示したうえで、文部科学省や早稲田大学教育学部吉田文教授の実態調査から教職大学院への期待や課題が示された。特に、長崎県教育大綱の理念に基づいて、長崎県教育基本計画を実現する中でより質を高めるために、長崎県教員研修計画と教職大学院を連携・連動させることの大切さが示された。そのうえで、教育への信頼の確保が何よりも大切であることが述べられた。

【感想】 教職大学院の特色を改めて知ることができた。より社会のニーズを意識した教育をしていくべきだと思った。特に最後にお話いただいたマスコミへの対応、保護者苦情への対応が、本当にその通りだなと思いました。また、専門性を高めていく上で、専門機関を知りそことどう繋がっていくかを知っておくことが管理職としての識見になると感じました。教職大学院で学ぶ院生に対して、専門性を高める指導を行っていきたい。



【概要】 ふるさと教育の意味・意義を示したうえで、血縁の教育としての家庭教育、学びの縁としての学校教育、地縁としての社会教育の非連動性の問題が指摘された。ふるさと教育には、過去に遡っていく学びと、未来から現在の有り様を考えていく学びがあり、人生100年から考えると生涯学習の基盤づくりが必要である。地域にある学校がスクールアイデンティティを確立するためには、地域社会との連携が必要であり、教育という社会活動を活性化させるために必要なソーシャルキャピタルが示された。

【感想】子どもの健全育成を願う様々な組織とつながり、計画的に、また、より効果があがるように活動していくことができるよう、コーディネートしていく必要があると思いました。地域づくりは人づくり、人づくりは地域づくり。学校教育の存在意義を改めて考えた。一人の人間は、多くの人間とつながっている"というお話(一節)が印象に残りました。最後に話があった「面と向かって」の関わりづくりは、教育の基本だと思っているので、現場に戻ったら積極的に関わっていこうと思いました。



3 日目(7 月 8 日 14:00~17:00 会場:環境科学部 A-21 番教室)

【進行役】研究担当副学部長 藤本登

講師①「小学校での英語の学びの意義と課題」 教育学研究科教授 中村典生 先生

【概要】小学校における英語教育について、グローバル化の意味と英語教育における連携の意義が説明された。そして、時間捻出の視点からカリキュラム・マネジメント例として、夏休みを短くする案、土曜日授業を実施する案、7時間目がある日を作る案、短時間学習を活用する案が示された。担当教員として担任と専科の例や、担任の英語力としての学修モデルや語学能力、講師も作成に携わった新教材の視点と活用例が示され、小学校英語としての慣れ親しみから定着に向けた取組の必要性が述べられた。

【感想】本日の話は実際に学校の中ですぐに使える内容であり、実際に学校の中で起きている課題を現場レベルで話していただきました。特に小学校の外国語学習、年間 70 時間の取り方は、本格実施されると本当に深刻な課題だと思います。中村先生からいくつかのヒントを出していただき、今後の参考に大いになるなと思いました。ありがとうございました。また、評価のポイントについてヒントが得られた。



講師②「多様化する家庭環境・子どもと教育」 教育学研究科准教授 内野成美 先生

【概要】家族構成や家庭環境の変化に伴って予想される子どもの環境変化から、保護者や子どもの社会性などをめぐる諸課題を整理したうえで、不登校、いじめ、児童虐待、子どもの貧困、進学率、LGBT(性的少数者)等の状況から、担任や担当者だけが一人で抱え込まない仕組づくりの必要性が示された。これからの教育相談体制として、学校・養護教諭、スクールカウンセラー、特別支援教育コーディネーターやソーシャルワーカーといった学校内外の連携が重要であり、教職大学院等の実践例が示された。

【感想】子どもの現状とこれからどのように接するべきか、居心地のよい学級づくりのためのポイントも分かりました。どの話ももっとお聞きしたかったです。資料をしっかり読み、自分のものに落としこんでいきたいと思います。どのお話もタイムリーでした。子どもへの対応や保護者支援の在り方についてヒントがもらえました。



講師③「アクティブ・ラーニングの意義と課題」 教育学研究科准教授 藤井佑介 先生

【概要】アクティブ・ラーニング(AL)について、時代の変容から求められる学び(資質・能力)とそれを受けた新学習指導要領に込められた思い・世界動向や大学入試改革から原理理解の必要性が示された。そして、AL の課題として、目的と手段の逆転現象から、学習者の能動的な学びを促す教育方法を整理した。授業改善の具体案として、長い見通しと子ども達の目指す姿を意識した授業づくり(逆向き設計)や「分からない」「困った」「間違い」を大切にする授業づくり、学びの可視化によるメタ認知力の育成、対話重視の支援ツールの活用、共有ビジョンの設定等を示し、センゲが提唱する学習する組織の三本柱による新たな学習を創造した。

【感想】 現場の教員は多忙さゆえ、学習指導要領改訂のねらい等をじっくり学ぶに至っていません。私は管理職として、今後も積極的に学び、学んだことを教職員に伝えていきたいと考えています。多様な視点からアクティブ・ラーニングについて考えることが出来ました。現場でも生かしていきたいと思います。学習指導要領の改訂、子どもを取り巻く環境の変遷、等、現在の教育に最も必要な内容で、大変有意義でした。ありがとうございました。

